

# 渦の伝承・書籍調査報告

高橋郁丸 協力研究員／新潟県民俗学会

## 1. はじめに

渦の伝承を調べるにあたり、まず出版されている書籍から渦の部分抽出した。とりあげた書籍は市町村史の民俗編や郷土の昔話集であり、厳密な歴史資料と比べると「口碑に日く」というものが多く、荒唐無稽と思われるものもあるが、そこから歴史の中に埋没している何かを読み取れると思う。今回調べた書籍は参考資料に記した30冊。渦や水辺にまつわる伝承を、今年度は150話ほどピックアップできた。

## 2. 水神であった蛇

『日本書紀』に大虬(みつち)、甕(おかみ)という神が登場する。実態はわからないものの、これらの神は後世には水の神と考えられ、大蛇や龍神の姿で描かれることもある。そのためか、今回調べた150話の中では蛇にまつわる話が一番多く、23話に達した。内容としては、主である蛇が引越する話が6例、主である蛇が退治される話が3例、主に見込まれた人が渦に引き込まれる話が2例、人が自ら蛇となり主になる話が2例、祟りを恐れてお堂を建立する話が2例。一番多かった、引越にまつわる話だが、池の埋めたため、棲めなくなった主が夢知らせで別の渦へ行くことを知らせる話(後述)など、人と蛇の結びつきが気になるところだ。また、神さまとして祀られたところ、身動きが取れなくなって転居していった鶉の子渦の主の話や、退治したものを祟りがないように祀った嵐渦の大蛇地蔵尊などの話もあり、これは渦に魂があることを象徴しているように思われる。

## 3. 各地に残る河童伝説

河童の話は22話あり、うち15話が人に捕まって折檻されている。許してもらった河童は何かしら人に礼をするのだが、薬や灸の方法を授ける医療系が5例、その他にはわび状を残したり、お礼の魚を持ってきたり、涸れない井戸を授ける例もあった。許された河童はそれ以来人を襲うこともなくなり、それに感謝した人が河童祭りをを行うようになった針ヶ曾根の例もある(図1)。また、木に縛りつけられて折檻された例もあり、縛られた木は河童松や河童杉と呼ばれて御神木ともなった。月渦ではこの河童松が昭和27年に伐採され、月渦中学校の校舎建築の材料として階段部分が作られたというが、すでにその校舎もない。河童が薬を伝授するのは、切られた腕を元通りにつけ、その傷薬を伝授したとすることが多い。河童は新潟県の十日町市ではスジンコと呼ばれ、

水神であったことが推測される。蛇と共に水神の性格をもつ存在だが、蛇は渦や川に作用し、河童は水というより人に関わっているように思われる。



図1 針ヶ曾根の河童祭り

## 4. 地蔵の伝承

次に多かったものが地蔵の話で9話あった。そのうち3例は人柱となった人や蛇を祀るものだった。西区中野小屋の西川前野堤の「おさき地蔵」、西蒲区曾根善光寺の「人柱おせん」(図2)。そして西蒲区井随嵐渦の「大蛇地蔵尊」である。このうち、おさきは六分として全国巡礼の経験をした女性だが、おせんは全く普通の女性だったようだ。本当に人柱はあったのだろうか。実際におせん地蔵に参拝に行ったところ、普通の地蔵は赤いよだれかけをかけているが、おせん地蔵は「水で着物がはだけて冷たくて気の毒だ」ということか、全身を包む着物がかけられ、裾までしっかりと合わせられていた。生々しい伝承で寒気もするが、伝えていかなければならない話だろう。地蔵ではないが、馬堀用水の田辺小兵衛俊定や曾根樋管の高橋源助の首が飛び、一念で用水を通水させたという話も開発のための悲しい伝説として残してほしい。



図2 おせん地蔵

## 5. 伝承に残る消えた渦

書籍調査では、現在存在しない渦の存在や、主な湖沼である16の渦以外の渦や池の伝承を知ることができ

た。伝承は真偽を問うものではなく、文化の流れを読み取るものである。ここに後学のために概要を列記する。カッコ内は所在推定地。

## (1) 北区

### 【げんじろ池（北区高森）】

げんじろという子供が水浴びをしたら主にとられて見えなくなったのでげんじろ池という。げんじろ池は堤防が作られてなくなり、主は棲みかが埋められると、黒雲に乗って山形県の善宝寺様の池へ行ったという。

### 【さら池（北区高森）】

ヨシが生えていて夏の日照りでも干上がらなかった。庵主さまがとおりがかったとき、池にきれいな皿が浮いていた。庵主さまはこの皿を拾おうとして落ちて死んだ。それでさら池という。

### 【婆さが池（北区葛塚）】

水害があって土手が切れたときに葛塚土手を通っていたお婆さんが死んでしまった。そこを婆さが池と呼んだ。

### 【毘沙門潟（北区濁川）】

新井郷川と阿賀野川との間にあった。

## (2) 東区

### 【伊三池（東区山木戸）】

伊三という男が6月1日に裸馬に乗って池の前を通ると馬はまっしぐらに池の中に走りこんだ。後に馬だけ戻ってきたが伊三は池の主の蛇に見込まれたのか戻らなかった。

### 【海老ヶ瀬の潟（東区海老ヶ瀬）】

海老ヶ瀬には亀池、中ノ潟、蓮潟、長潟、海ノ天井、神様池、才兵衛潟、赤池、新田の池という8つの池があった。大正2年の耕地整理などで皆埋まった。昭和39年の新潟地震の時に池であったところは地面が陥没した。もともと松ヶ崎開削前に阿賀野川が通っていた場所である。

### 【亀池（東区海老ヶ瀬）】

津島屋境にあった一町歩ほどの池。斎藤間右衛門という田畑をたくさん持っている人が瓶かめを洗って干すと、何度も瓶が池の中に落ちた。それでカメ池という。大きな亀の主が棲んでいたともいう。

### 【中ノ潟（東区大形）】

中ノ潟にも大亀が棲んでいた。甲羅の直径が1メートルあまり、たびたび水面上に顔を出すので漁師は恐れて中ノ潟で漁をすることを嫌った。この大亀は時々カナ蛇に化けた。中ノ潟でたくさん漁ができててもカナ蛇が水面に現れるとそれまでの大漁がうそのように全く釣れなくなった。それで漁師は水面にカナ蛇が現れると釣りをやめた。

### 【蓮潟（東区海老ヶ瀬）】

長さ二間くらいのキツォ舟程の大きさのある主が棲んでいた。

## (3) 中央区

### 【浦潟（中央区沼垂）】

北越奇談に登場。信濃川から新渠に抜ける舟道になっている。

### 【お蔵の池（中央区沼垂）】

沼垂小学校の場所に昔新発田藩の四十八のお蔵があり、いろは四十八蔵といわれた。そばに池があり、蛇がたくさん棲んでいた（図3）。この池で子供が死んだり、跡地が小学校になってからも運動会が雨になるのは蛇の祟りだといった。



図3 お蔵の守り神だった高砂稲荷

### 【御駒洗の池（中央区鳥屋野）】

承久3年8月北条義時の承久の乱の逆威により順徳上皇が佐渡島へ御遷幸した時、鳥屋野に親鸞の遺跡を訪ねた伝承による。

### 【三平池（中央区女池）】

女池は俗名で、昔は三平池といい、ここに三平橋がかかっていた。三平池は5千坪ほどの池で、八畳敷きもあるという大亀の主がいた。

### 【下所の池（中央区女池）】

昭和11年に鉄道局ができる時に、下所の池はなくなった。池の主がある人に夢知らせをし「長いこと厄介になったども、ここにはいられなくなって、これから鳥屋野潟へ行くすけ、会いたくなったら鳥屋野潟へ来てくれや」といった。鳥屋野潟へ行って肉を水面に投げてやると、胴が3尺もある大蛇が姿を現して肉をくわえて水中に潜っていった。

### 【藤巻池（中央区鳥屋野）】

藤巻池は享保年間の大破堤の跡。明治43年ころまで存在した。この池の主は非常に美しい人魚で、月夜の晩など泣いたり歌ったりする声が聞こえたという。また甲羅が4尺から6尺四方もある亀が主だともいわれた。この亀は10年から15年に一度、池の大掃除をした。すると池のフナ、ボラ、ドジョウなどの魚がごとく半死半生のあり様で浮き上がった。明治18年の中秋の名月の晩、村人たちが浮いた魚をザルや桶ですくい上げたという。

## (4) 江南区

### 【牛池（江南区）】

藤山と駒込の境の元農協の倉庫の裏手と畑地帯の中間

に牛池と呼ばれる田があり、かつては池だったという。間平どんのおかかが洗濯をして洗濯物を池の中に落としてしまった。すると池の中から牛のような化け物がでてきたので牛池という。

#### 【鵜の子潟（江南区鵜の子）】

鵜の子潟に年を経た蛇が棲んでいた。胴回りは4斗樽を転がしたようだった。秋大根を沼垂の市に売りに行った夫婦が頭と尾を谷内に突っ込んだ大蛇を目撃した。夫婦は恐ろしさで寝込み、亡くなった。里人は大蛇を和多都美権現と送り名して祠を建てて祀った。大蛇は祀られて動きが取れなくなり、会津の猪苗代湖に行った。猪苗代湖の主は大きな赤ドジョウだった。大蛇はドジョウを征伐して猪苗代湖の主になった。主は望郷の念にかられた時、ここに帰るが潟はなくお宮も隣の神明様より小さくなってしまった。

#### 【浦潟（江南区早通）】

集落の中に一軒の鍛冶屋があったので、浦潟をかじうらという。

#### 【美女池（江南区袋津）】

伊夜日子神社にあった池。池のあたりの庄屋様のところに美男の誉れ高い一人息子、対岸三王山に住む百姓屋に美人の娘がいた。相思相愛となったが、身分の違いから許されず、庄屋の息子には縁談が着々と進み、娘は生きる望みが無くなって池に投身した。それから美女池と呼ばれるようになったという。

#### 【ベラ潟（江南区早通）】

ベラやボラという魚の名前からの命名か。

#### 【丸潟（江南区丸潟）】

丸潟周辺には丸潟、尾長潟、ベラ潟などの潟があった。丸潟のほりから開発がすすめられ、地名も丸潟となる。

#### 【川根潟（江南区早通）】

下早通の東方、村里近くにあり以前は面潟、五合の穴などと共に淡水魚の宝庫であった。川骨が多く生えていた。

#### 【駒首潟（江南区早通）】

駒首潟に続く下流を駒繫潟（現在は転化して小松堀）といった。後に五合の穴、ゴボウの穴と言われた。ゴボウを引き抜いたあとのように深さがあるのでこのように言われたか。葦や真菰が高く生え茂り、魚の宝庫ではあるがさびしいところだった。よく竜燈（水中の燐光が燈火のように連なり現れる現象）があったという。

#### 【焼鮎の池（江南区曾野木）】

親鸞が鳥屋野に草庵を作ったころ、曾野木に説教に来て、村人が接待した。焼鮎を出すと、親鸞は出家の身なので近くの池へ投げた。焼鮎は急に泳ぎだした。その後、池にすむ鮎は全部こげたような色になった。

#### 【新池（江南区楚川）】

新池には主の大蛇が住んでいた。漁をするとその晩、

高熱に苦しむため、漁に行くときに押んでから行く者もいた。池の水の色で豊漁か不漁かがわかったという。大正頃には池のほとりで寝そべる二升びんほどの大蛇を見たものがある。この池に砂が入って浅くなり、主は天野のチンショ（沈床のことか）に移った。明治23年に川が分かれる舞潟付近で右側の流れを締め切って現在の本流一本になった。このときチンショにいた主が、一人の漁師の夢枕に立って「おれはここにいられなくなったすけ、佐潟へ引越すぞ」といって佐潟へ移ったという。

#### 【泥潟（江南区泥潟）】

ひどい湿地帯で腰まで泥に浸かって作業していた泥田であった。

#### 【長池（江南区木津）】

木津には樽川池、谷地池、長池、三四郎池、小左衛門池、水戸池、神明様池とたくさんの池があった。これはみんな水害の切れ込みのあったところで、それが池となった。長池は、木津から沢海に至る間の堤外地。夏の炎天が続くと、木津も沢海も藁で大きな竜を作り昇天の格好になぞらえて飾り、酒肴を供えて雨乞いをした。祈願が通じて不思議にも雨が降ったといわれている。

#### 【新潟田（江南区早通）】

割野と早通の境の地籍。新しく潟を開拓してできた田。

#### 【抜潟（江南区船戸山）】

泥深い田で、かんじきをはかなければ腰まで没するという底が深い状態であるという名か。

#### 【尾長潟（江南区・不明）】

潟の末尾が尾のように細長くひいた形態からの名称。

#### 【面潟（江南区早通）】

水路、堤、土手等の管理に手がかり、長潟では持ちきれず、地名をそのままに早通に移管された。

#### 【水戸池（江南区二本木）】

二町歩以上もある大きな池があった。小次郎屋敷八幡神社の所有で、元禄以前の大洪水のときに小阿賀野川の土手が切れたときにできたといわれる。深い所は8間（14m）もあるところから、「八間堀」とも呼ばれていた。この池は九右衛門どんの釜が喰り込んでこれが池の主になっていたという言い伝えがある。大雨が降り続いた朝、池の中に数百の魚が死んで浮いた。鵜の子に兄池とおじ池の2つがあって大蛇がすんでおり、おじ池の大蛇が水戸池の主になろうと行ったり来たりしていたが、泥がたくさんあり住みにくいと思ってか鵜の子池に帰ったのだという。大正3年ころ、八幡神社を再建するために水戸池を大地主原家から買い取ってもらった。原家では二本木の農民たちのためにこの池を埋め立てて田んぼにしたが、池の主がたたと恐ろしいのでしばらく約200坪（660平方メートル）ほど池として残っていた。

### 【御手洗の池（江南区木津）】

元龜2ころ、薬師如来が土中に埋まっていた早く出たいと葦澤吉左衛門に夢知らせがあった。木津開発者の田中大次助、石井隼人佐らに相談し掘ってみると、六尺有余の薬師像が出てきたという。ここが御手洗の池で、池の水は眼の病に効くとされた。

## (5) 秋葉区

### 【三五郎池（秋葉区・不詳）】

蒲原郡旭村（朝日か?）から、五泉へ越える山中に三五郎池あり。この池に四尺ばかりなるイモリあり。晴天静かなときは必ずイモリ水上に浮かぶ。

### 【大日瀧（秋葉区・不詳）】

平安ころに真言寺院があり大日如来があったと思われる。新保の大日さまはこの寺の本尊か。

### 【親子瀧（秋葉区新町）】

新津丹波守勝資が妾を愛したため、奥方は幼児を背負って近くの瀧に入水、大蛇となって夫も妾も一飲みにと城をめがけた。勝資は聖徳太子作といわれる観音像を投げつけ、大蛇は解脱昇天する。尊像は行方知れずになったが正法寺六世・文能和尚の時に境内の梨の木の上にこつぜんとして現れる。これを聞いた藩主は寺を建てて安置、今の新町観音である。母子の入水した瀧は親子瀧と呼ばれ、その後水田となる。大蛇が城に向かって泳いできたという堀を蛇堀と呼んでいたが、瀧も堀も残っていない。

### 【鎌倉瀧（秋葉区横川）】

小須戸には大日瀧、若宮瀧、頭無瀧などの瀧があった。鎌倉瀧は、北条時頼越後巡廻の際、風景があまりにも鎌倉に似ているので名づけられたと言われる。「芦の葉の風のまにまにうねり来てながめもあかぬ鎌倉の瀧」雑魚も取れ、百姓のたつきとなった。小向の忠兵衛が舟を出して瀧を耕地にしたいと思っていたところ、1尺5寸ほどの蛇が舟に上がり込み忠兵衛を飲もうとした。なんとか退治し舟の外に投げようとすると1丈5、6寸の大蛇に変わっており、驚いて信濃川まで出て川へ流した。忠兵衛は熱を出し亡くなる。一家も死に絶え、鎌倉瀧の片隅に5間四方ほどの空き地に大蛇の塚を作った。

※鎌倉瀧の大蛇には、本住寺の蛇頭さまの話もあるが、この伝承は本住寺の伝承とはずいぶん異なる。

### 【婆池（秋葉区川口）】

川口の藤作の妻が、嫁に自由に味噌を使わせまいと魂が小さな蛇となり味噌桶のふたの上でぐるぐるを巻いていた。嫁は蛇がつくと味噌が腐ると思い、焼け火箸で蛇の頭を押さえると、寺で説教を聞いていた妻が「熱い」と言って卒倒する。火箸の焼け跡が額についた妻は自分を恥じ、自宅前の池に投身して池の主となり、池は婆池と呼ばれる。池の主となっても婆は寺参りを

して尾で鐘をつき、鐘をだめにしたため、藤作家では二度も鐘を寄進した。鐘は太平洋戦争で供出された。一日に婆池の色が何度も変わるとか、池の水がなくなりそうになると必ず雨が降るのは婆が姿を見せたくないからだと言われた。主は成長し池が狭くなったため、雁巻淵へ引っ越した。藤作の子孫は移住した蛇にごちそうを捧げた。ごちそうを並べたお膳を水に浮かべると淵の中から大蛇が現れ尾で巻いて沈み、しばらくたつとお膳が浮き上がったという。婆池は昭和43年に埋め立てられた。

### 【若宮瀧（秋葉区矢代田）】

矢代田に十二屋敷という地名あり。近年まで十二屋敷という祠堂を祀っていた。順徳院が佐渡へ流されると第二王子広臨親王が父帝を深く慕い、ひそかに湯野清忠、千野帯刀など従者12人を従え佐渡にわたろうとしたが北条の令が厳重で渡れず、家来とともに矢代田龍玄村に隠れていた。小口村の間入道閑斎のもとにいたが、能代領主左衛門尉菅吉の知るところとなり自決。貞慶2年11月19日16歳だったという。小口の若宮社、五泉能代の若宮神社は親王を祀ったもの。龍玄にも若宮社という小祠があった。金津と新保の間に若宮瀧という瀧があった。親王の徳を慕って名づけられたもの。

### 【七色の池（秋葉区）】

素戔鳴の娘、市杵姫が道に迷って越後に来た。秋葉山の波打ち際の前で泣いていると七人の童子が現れ、家を建ててあげるから嘆き悲しむなと慰める。七人の童子が土を盛るために穴を掘っていると童子は津波にさらわれる。童子が掘った穴は池となった。姫は童子たちの名を呼んでは小石を拾って七つの池の中へ投げ、悲しみながら泣き死にした。後世の人は気の毒に思ってその池の傍らを通る時には必ず石七つを拾い、池の中へなげたという。

## (6) 西区

### 【白鳥瀧（西区坂井輪）】

白鳥瀧に簀（図4）を立てて漁をしていた男が、魚を網に包んで帰ろうとしたが、どうしても舟を岸に近づけることができない。一晚中瀧の中をぐるぐる回り、明け方ようやく岸につくことができた。家で網をあけると、見たこともない大きなナマズが入っていた。このナマズが瀧の主であったのか、一晚中瀧の中を回らせたのを気の毒に思った瀧の主が恵んでくれた



図4 簀立て模型  
(瀧東歴史民俗資料館蔵)

のか。潟は干拓され、現在は県立新潟工業高校が建つ。

#### 【琵琶首潟（西区小新）】

形が琵琶の首に似ているのでつけた名称という説と、黒鳥兵衛を討伐した源義綱が黒鳥方の首を切り落とした潟だという説がある。

#### 【オジ池（南区吉田新田）】

山王の山崎某という家の美男のオジと隣村の名主の娘が相思相愛だったが身分の違いで反対され、心中の約束をしたが娘は現れなかった。オジは一人身を投げて大蛇と化し池の主になった（図5）。主になったオジは美男だったので、黒崎の雁が池の主、金巻姫が婿にと所望したり、漆山の赤池の赤姫が懸想して会いに来たという。オジは初恋の思いが忘れがたかった。山王樋管の改修をして残土が出たのでオジ池を埋めるという計画が出た。埋め終わるころ、三尺もある真っ白な大鯉があがった。オジの化身だろうと供養して中之口川に放つと鯉は波を立てて遡上していった。



図5 オジ池の主

### (7) 南区

#### 【赤池（南区漆山）】

黒鳥兵衛を打ち取って引き上げてきた加茂次郎が漆山の池の畔で休み、兵衛を切った刀をこの池の水で洗ったところ、澄んでいた池の水がたちまち赤色に変じた。それ以来、この池の水は日に三度色が変わり、赤池と呼ぶようになった。ある夜、大雨が降り、赤池が氾濫した。その時、黒雲に乗った一匹の龍が水中深く姿を没した。それ以来、この龍が赤池の主となった。漆山では6/25に寺御講が行われており、毎年美しい婦人が参詣していた。立ち去った後は暈が濡れており、あの婦人は赤池のぬしではあるまいかと言われた。また、赤池は橋を中心に北側に大蛇、南側に亀が棲んでいるという話もあった。どちらも自分が赤池の主と思っていた。時々自分の領域を広げようとして衝突した。池畔の土がぐずれ落ちるので小さなお堂を建てて大蛇を祀り、供物を供えてお参りするようになった。それ以来大蛇と亀は争わなくなった。

#### 【川根潟（南区白根）】

現在の白根第一中学校の付近一帯を川根潟といい、耕地整理前までは泥沼で浮田のような状態だった。貞享・元禄の頃から和泉村の人々が開墾してきたが藩に無届だった。検地の時に和泉村の者は沈黙していたが、白根村名主袖山忠兵衛が川根潟の水中深くより刈り取った二株の稲を掲げ、祖父伝来の田であることを主張、認められて川根潟は白根村の所有するところとなり土を運び入れて少しずつ潟を埋め立て、川根潟を開墾していった。

#### 【鴨池（南区上曲通）】

沼沢地で鴨の飛来があったところ。埋め立てて田とした。

#### 【千野潟（南区吉江）】

中之口川近くの吉江村のほitori。ジュンサイ、菱などが多く生え、これをとって生業とする者がいた。

#### 【嵐潟（西蒲区井随）】

洞のめぐりが一尋余り長さが25尋余りの大蛇が住んで田畑を荒らした。宝暦3年9月ころ、一月続く雨に地水があふれて潟となった。大蛇は踊るように尾を振って稲穂の上を渡り来た。井随幡本嘉左エ門が鉄砲で退治し、亡骸を燃やすと骨が俵に五俵も出た。殿様も大いに喜び褒美を尋ねられた嘉左エ門は1年間の村普請がただで済むように頼み、聞き入れられる。大蛇の骨は村のはずれの道野辺に葬り、地藏様を建立して村の守り地藏とした。

### (8) 西蒲区

#### 【鳳羽潟（西蒲区釣寄）】

ガンバガタ。雁などが潟に来たからか。

#### 【鎧潟（西蒲区船越）】

かつては潟ではなく海だった。黒鳥兵衛詮任と加茂次郎が氏潟城で決戦となり、兵衛は打ち取られ、首は黒鳥島、胴を氏潟に埋めた。また八幡太郎義家公が泥のついた鎧を潟で洗ったことからここを鎧潟という。

鎧潟の主は大蛇だった。大蛇は竜や蛇などが受けるという三熱で苦しんでいた。木山の寺が三条で釣鐘を求め、舟で運んだ。途中鎧へさしかかると大蛇があらわれて釣鐘を潟の底に沈めてしまった。そして体をこすりつけて三熱の苦しみから逃れているという。

また、鎧潟にすむ大蛇が角田山に住みたいと思い、榎谷の虚空蔵様をお願いをした。虚空蔵様は、もしこの山に沢が100あったらよかろうと言われた。そして自分の手で一つの沢を隠して大蛇に教えさせた。大蛇が何度数えても99しかない。それであきらめて鎧潟へ帰っていった。4月8日と10月8日の薬師の日だけは、大蛇が角田山に登ることを許された。そのため雨が降るという。

### 【鏡瀉（西蒲区岩室）】

瀉上、船越、横曽根地方一帯は鏡瀉という瀉だった。近くに利左衛門という家があり美しい娘がいた。井戸端の水鏡を見て、いつも髪をすいていたが、ある時突然いなくなった。井戸へ落ちたのでは、と井戸へ入ると土の崩れたところに蛇がとぐろを巻いていた。眼だけが大きくらんと輝いていたので井戸の外へ出して鉋で殺すと死体は急に大きくなりもっこに三つもあった。この蛇は鏡瀉の主だろうといわれた。主を失った鏡瀉はだんだん浅くなり、田になった。横曽根の神社に蛇松という老松があった。この松の根元に大蛇を埋めたのだそうだ。

### 【日出瀉（西蒲区高野宮）】

小中川を中心に灰方から高野宮までは、日出瀉（ひいでがた）という瀉だった。間瀬の孫九郎という豪族が加茂まで舟で商いをするときに出瀉は舟道であった。

### 【岩穴（西蒲区角田）】

日蓮が佐渡へ流されるとき、船が流され角田浜についた。一人の童子が現れ、岩穴に七面の大蛇がいて人々を困らせているので法力で害を取り除いてほしいという。岩穴の入り口で経を読み、小石に南無妙法蓮華経の七文字を書いて穴の中へ投げ込むと大蛇は姿を現し上人の教化で過去の悪行を改め法華経を信仰する人の守護神となることを約束し、龍の姿になって飛び去った。身延山の七面山に鎮座する七面大明神がこれである。  
※この話で描かれている時代は、この岩穴の中まで海水が満たしていたようだ。



図6 七面大明神の法要（2016年）

## 6. おわりに

このたびご紹介させていただいた話はたくさんある伝説の一部である。記述を見ても、伝承地がどこであるのかははっきりしないものもある。さらに関連の資料を調べ、新潟の瀉の伝承を探っていきたい。

### 〈参考資料〉

青木宏/編（1976）黒埼物語。黒埼町教育委員会  
味方村誌編纂委員会/編（2000）味方村誌。味方村

茨曾根地区公民館/編（2001）あつたてんがのいばら  
そね第二集。茨曾根地区公民館  
岩室村史編纂委員会/編（1974）岩室村史。岩室村史  
編纂委員会  
鏡淵九六郎/編（1933）新潟古老雑話。新潟温古会  
柏 大治（1970）こすど風土記。小須戸町文化財保存協  
会  
瀉東村誌編さん室/編（1989）瀉東村誌。瀉東村  
亀田町文化財保護審議会/編（1982）ふるさとの地名  
亀田。亀田町教育委員会  
斬風曾我承緒（1929）昭和記念越佐要覧。越佐要覧刊  
行会  
金塚友之丞（1970）新潟県民俗学会叢書 蒲原の民俗。  
野島出版  
駒形魁（1987）越佐伝説めぐり。鳥屋野出版  
小山直嗣（1967）越佐の伝説。野島出版  
小山直嗣（1972）続越佐の伝説。野島出版  
小山直嗣（1973）越佐の伝説。野島出版  
小村式/編（1959）亀田町史。亀田町公民館  
白根郷普通水利組合/編（1953）白根郷治水史続編。  
白根郷普通水利組合  
白根市教育委員会/編（1989）白根市史 巻7 通史。白  
根市教育委員会  
橋崑崙（1978）北越奇談。野島出版  
月瀉村誌編輯委員会/編（1978）月瀉村誌。月瀉村  
豊栄市史調査会民俗部会/編（1999）豊栄市史民俗  
編。豊栄市  
中蒲原郡/編（1918）中蒲原郡誌 上編。中蒲原郡  
改訂中之口村誌編集委員会/編（1987）中之口村誌。  
中之口村  
新潟市史編纂室（1985）新潟市合併市町村の歴史研究  
報告史料編5補遺編。新潟市  
新潟市史編さん民俗部会/編（1991）新潟市史資料編  
10民俗編1。新潟市  
新潟市史編さん民俗部会/編（1994）新潟市史資料編  
11民俗編2。新潟市  
新津市史編さん委員会/編（1991）新津市史資料編 第  
6巻民俗・文化財。新津市  
西川町教育委員会/編（1973）西川町史考 その2。西  
川町教育委員会  
西川町教育委員会/編（1987）西川町史考 その15。西  
川町教育委員会  
巻町/編（1992）巻町史資料編6民俗/平成4  
横越町史編さん委員会/編（2000）横越のむかし語  
り。横越町